

中学 2 年 国語科 教材別テスト⑩ 「漢詩の風景」 模範解 答・解説

教材別リメイク版 中学 2 年 国語 / 「漢詩の風景」(光村図書『国語 2』)

【このテストの使い方】

教科書の現代語訳や鑑賞文は載せていません。『国語 2』の「漢詩の風景」のページを開いたまま解答します。問題用紙にのせた三首の白文と書き下し文は、昔から伝わる唐の詩そのものです。

この教材は、①漢詩の形式(絶句・律詩／押韻・対句／起承転結)という知識と、②景色を描くことで心情を表すという読み取りの、二つを行き来しながら学ぶところに特徴があります。大問二・三で用語を固め、大問四で三首を読み比べる構成にしています。

配点一覧

観点	大問	内容	配点
知識・技能 50点	一	漢字の読み書き (20問／①～⑩読み・⑪～⑳書き)	1 点×20 = 20点
	二	漢詩の形式の用語 (絶句・律詩／句数と字数／起承転結／押韻／対句／聯)	2 点× 9 = 18点
	三	漢文の基礎と語句 (白文・訓読文・書き下し文／返り点／置き字／唐・詩仙・詩聖)	2 点× 6 = 12点
思考・判断・表現 50点	四	「春暁」「黄鶴楼送孟浩然之広陵」「絶句」の読解 (12小問)	50点
合計			100点

【出題のねらい】

- ① 一句の字数と句数から、五言絶句・七言絶句・五言律詩・七言律詩を正しく区別できるか。
- ② 押韻の決まり (絶句は第二句末と第四句末、七言ではさらに第一句末) を、実際の詩で確かめられるか。
- ③ 起句・承句・転句・結句という構成をつかみ、とくに転句で内容が大きく転じることに気づけるか。
- ④ 白文・訓読文・書き下し文の区別、返り点 (レ点・一二点) の読む順序、置き字という漢文の約束

を理解しているか。

⑤ 三首をくらべ、景を描いて情を語る（叙景の中に心情をにじませる）という漢詩の手法を、自分の言葉で説明できるか。

一 漢字の読み書き (1点×20=20点)

番号	解答	番号	解答
①	かんし	⑪	詩人
②	あかつき	⑫	更ける
③	しょしょ	⑬	慕う
④	せきべつ	⑭	叙景
⑤	おさな (い)	⑮	奪われる
⑥	ゆうだい	⑯	故郷
⑦	ほ	⑰	友情
⑧	えが (く)	⑱	輝く
⑨	ふぜい	⑲	訪れ
⑩	ひび (く)	⑳	暗唱

小計 20点

【注意したい字】

- ②「暁」は「あかつき」。「春暁」という語では「ぎょう」と音読みするので、訓読みとの区別に注意。
- ③「処々」は「しょしょ」。「処」を「どころ」と読まないこと。⑤「幼い」は「おさない」。送りがない「い」まで必要。⑥「雄大」は「ゆうだい」。「雄」の左側は「厶」の形。⑨「風情」は「ふぜい」。「ふうじょう」「ふぜん」と読む誤りが多い。⑫「更ける」は送りがない「ける」まで。「夜が深ける」は誤り。⑬「慕う」は送りがない「う」まで。「募う」「墓う」と書き誤らないこと。⑭「叙景」は「じょけい」。「叙」の右側は「余」。⑮「奪われる」は「大」の下が「隹」ではなく「寸」をふくむ形(奪)。⑯「輝く」は送りがない「く」まで必要。「輝」は「光」＋「軍」。⑰「訪れ」は送りがない「れ」まで必要。⑲「暗唱」の「唱」は口へん。「暗誦」も意味は同じだが、教科書体では「暗唱」。

二 漢詩の形式の用語 (2点×9=18点)

番号	解答	解説
(1)	五言律詩	「五言」＝一句の字数が五字。「律詩」＝全部で八句。字数が先、句数があと、という名前のつくりで覚える。
(2)	七言律詩	「七言」＝一句七字、「律詩」＝全部で八句。五言絶句・七言絶句とあわせ、四種類を表にして整理しておくこと。
(3)	五字＝五言 七字＝七言	一句の字数で呼び名が決まる。五字＝五言／七字＝七言。これに句数（絶句＝四句・律詩＝八句）の名をつないで「五言絶句」のように言う。両方そろって2点（片方だけは1点としてもよい）。
(4)	起句・承句・転句・結句	第一句＝起句（歌い起こす）、第二句＝承句（受けて進める）、第三句＝転句（内容を転じる）、第四句＝結句（まとめる）。四つそろって2点。順序がちがえば0点。
(5)	聯（連）	律詩は八句を二句ずつ四つに分け、順に首聯・頷聯・頸聯・尾聯と呼ぶ。「連」と書いても正答。
(6)	押韻	句末に同じ響きの音をそろえること。「韻をふむ」とも言う。詩に一定のリズム（調子）が生まれる。
(7)	イ	絶句の原則は第二句末と第四句末。「エ 全ての句」は誤り。
(8)	第一句	一句が七字の詩（七言絶句・七言律詩）では、(7)に加えて第一句末でも韻をふむのが原則。律詩では偶数句末がすべて韻をふむ。
(9)	対句	語の組み立てや意味が対応する二句を並べる技法。均整（つり合い）のとれた感じと、場面の広がりを生む。読み「ついく」。

小計 18点

三 漢文の基礎と語句 （2点×6＝12点）

番号	解答	解説
(1)	①イ ②ウ ③ア	何もつけない漢字だけの文が白文。それに句読点・返り点・送り仮名を加えたものが訓読文。訓読文を日本語の語順で漢字と仮名に書き改めたものが書き下し文。三つそろって2点。「白文→訓読文→書き下し文」という順番で覚えるとよい。
(2)	ア	レ点は、すぐ上の一字に返って読む印。イは一・二点のはたらき。
(3)	高 → 楼 → 登	返り点のついていない字から上から順に読む。「登」には〈二〉があるので飛ばし、「高」を一字目、〈一〉のついた「楼」を二字目、最後に〈二〉の「登」を読む。書き下せば「高樓に登る」。三字の順序がすべて合って2点。
(4)	置き字	書かれてはいるが訓読のときに読まない字。「而」「於」「乎」「焉」など。送り仮名の形の中に意味が吸収されている。
(5)	李白＝詩仙 / 杜甫＝詩聖	李白は自由で雄大な詩風から詩仙、杜甫は人の世の苦しみを見つめた作風から詩聖と呼ばれる。二人そろって2点。入れちがいは0点。
(6)	唐	三人はいずれも唐の詩人で、漢詩が最も栄えた盛唐と呼ばれる時代に活躍した。「唐」の一字で正答。

小計 12点 / 知識・技能 合計 50点

【形式の見分け方・三手順】

① 一句の字数を数える（五字か七字か）→「五言」「七言」が決まる。② 句の数を数える（四句か八句か）→「絶句」「律詩」が決まる。③ 句末の字の音をたしかめる→押韻の位置を確認する。この順番で見れば、どんな詩でも形式を言い当てられる。

四 「漢詩の風景」の読解 (50点)

番号	解答	解説・採点のポイント
(1) 3 点	【A】孟浩然 【C】杜甫	【A】「春暁」は孟浩然、【B】「黄鶴楼送孟浩然之広陵」は李白、【C】「絶句」は杜甫。二つそろって3点（片方だけは1点）。 「孟」の下は「子」、「浩」はさんずい、「甫」は「補」と書かない。
(2) 3 点	五言絶句	一句五字（春眠不覚暁）×四句。字数と句数を数えれば決まる。 「五言律詩」「七言絶句」は0点。
(3) 4 点	ア	第二句「处处聞啼鳥」＝あちこちで鳥の鳴く声が聞こえる。眠ったまま、耳だけで朝を感じているところがこの詩の味わい。イの「風雨の音」は第三句で、しかも昨夜のことなので誤り。
(4) 4 点	ア	第三句（転句）で、それまでの「春の朝の眠り」から話題が昨夜の風雨へと大きく転じ、結句で「花はどれほど散ったのだろう」と散った花へ思いが向かう。イ「今日の天気」、ウ「鳥の行き先」は本文と無関係。
(5) 5 点	(例) 春の朝の眠りの心地よさを楽しみつつ、春が過ぎてゆくのを惜しむ心。(32字)	「春の朝の眠り（朝寝）の心地よさ」(2点) + 「春が過ぎゆくのを惜しむ・花が散るのを惜しむ」(3点) の二点で採点。 どちらか一方だけなら半分の得点。「鳥がかわいい」「雨がいやだ」など、春のうつろいを惜しむ心に触れていないものは0点。「～心。」で結んでいないものは－1点。二十五～三十五字から外れたものは－1点。
(6) 4 点	七言絶句 / 楼・州・流	一句七字×四句なので七言絶句。七言では第一句末も韻をふむので、第一句末「楼」・第二句末「州」・第四句末「流」の三字。形式(2点) + 押韻の字(2点)。三字そろってはじめて押韻の2点。「楼・州」の二字だけ、または第三句末「尽」を入れたものは0点。
(7) 5 点	(例) 舟の帆が見えなくなるまで見つめ続け、友との別れをいつまでも惜しむ気持ち。(36字)	「舟（帆）が見えなくなるまで見送る・見つめ続ける」(2点) + 「別れを惜しむ・名残惜しい・友を思い続ける」(3点) の二点で採点。 「さびしい」「悲しい」だけで、見つめ続ける視線に触れていないものは2点。「友が無事に着くか心配」は0点。「～気持ち。」で結んでいないものは－1点。三十～四十字から外れたものは－1点。

(8) 4 点	ア	第四句「惟見長江天際流」＝ただ長江が空の果てへ流れていくの が見えるだけ。舟が見えなくなっても、なお同じ方向を見つめて いる。「惟（ただ）」の一字に惜別の情がこもる。
(9) 3 点	ア	【C】には固有の題がなく、詩の形式名「絶句」がそのまま題と して使われている（無題の詩）。イ・エは「絶」の字から意味を想 像した誤り、ウは根拠がない。

四 「漢詩の風景」の読解（つづき）

番号	解答	解説・採点のポイント
(10) 4 点	然・年	五言絶句なので第二句末「然」と第四句末「年」の二字。二字そろって4点。第一句末「白」・第三句末「過」を入れたものは0点（七言とちがいが、五言では原則として第一句末は韻をふまない）。なお【A】「春暁」は第一句末「暁」も韻をふむ例外（首句入韻）なので、押韻を答えさせる設問には用いていない。
(11) 5 点	（例）碧い川や青い山、白い鳥と燃えるような花という美しい春の景が、故郷に帰れない愁いを引き立てている。（48字）	「碧・青・白・赤（燃えるような花）」という色鮮やかな春の景色」（2点）＋「故郷に帰れない旅人の愁い・いつ帰れるのかという思い」（2点）＋「美しい景が、かえって愁いを深めている（景と情の対比）」（1点）で採点。 景色の説明だけ、または心情だけのものは2点どまり。四十～五十字から外れたものは－1点。
(12) 6 点	（例）【B】 舟が消えるまで見つめ続ける姿から、言葉にしない友への思いの深さが伝わってきたから。（41字）	【ループリック】 記号を書いている（1点）／詩の中の具体的な表現・情景を取り上げている（2点）／自分がどう感じたかを自分の言葉で述べている（2点）／字数・文末が整い、誤字がない（1点）。 Aを選んだ例「眠ったまま鳥の声を聞くという静かな描き方で、春の朝のやわらかさが伝わってきたから。（41字）」。Cを選んだ例「鮮やかな春の景色のあとに、いつ帰れるのかという一言が置かれ、愁いの深さが心に残ったから。（44字）」。 詩に触れず感想だけのものは2点どまり。四十～五十字から外れたものは－1点。

思考・判断・表現 合計 50点 / 総合 100点

【この教材で落としやすいポイント（8つ）】

1. 形式名は「字数＋句数」の順。一句の字数（五言・七言）を先に、句数（絶句＝四句・律詩＝八句）をあとに言う。
2. 押韻の位置は、五言と七言でちがう。絶句は第二句末・第四句末、七言ではさらに第一句末が加わる。「絶句」（杜甫）は然・年の二字、「黄鶴楼…」（李白）は楼・州・流の三字。
3. 第三句（転句）が山場。「春暁」では昨夜の風雨へ、「絶句」では帰れない我が身へと、ここで世界が切りかわる。
4. 「春暁」は「春の朝は気持ちいい」で終わらせない。散った花を思う結句まで読んで、はじめて春を惜しむ心が見えてくる。
5. 「黄鶴楼…」で問われるのは見つめ続ける視線。舟が消えてもなお川を見ている——その動かない姿が惜別の情そのもの。
6. 「絶句」の美しい春の景は、楽しさの表現ではない。美しいからこそ、帰れない旅の愁いがいっそう深くなる（景と情の対比）。
7. 対句の読みは「ついく」、叙景は「じょけい」、対句は「対比」ではない。語句の読み・書き分けで失点しやすい。
8. 白文→訓読文→書き下し文の順と、返り点（レ点＝すぐ上の一字／一・二点＝へだてて上に返る）、置き字は読まないという三つの約束を、必ず暗記しておく。

